



笑顔いっぱい かがやく入谷っ子

子供たちの安全・安心を守るために

8月2日より国から緊急事態宣言が出され9月12日まで延長されるほど、新型コロナウイルスの感染は爆発的であり、収まる兆しが見えてこない中での2学期のスタートとなりました。修学旅行が日帰りでの校外学習となったり、運動会が延期となったりと、行事の変更等も多くあります。

本日、始業式の中で、新型コロナウイルス感染症について、現状は厳しく、罹患した人、その家族が苦しく悲しい思いをしていること、そして、命を守るために医師、看護師、救急隊員、保健所の方々が、多くの時間を使い対応に当たってくださっていること、その中でも未だ先が見通せない状況であると話をしました。子供たちには、下記の3点についてお願いをしました。

- 自分が感染しない、そして大切な家族や友達を感染させないために、何ができるか一人一人が考えて行動すること。
- 周りで感染した人がいたら、その人の気持ちを考えて行動してほしいこと。
- 不安や心配なことがあったら、一人で悩まず、大人に相談してほしいこと。

一人一人が、適切な行動は何かを考えて行動することや子供の声に耳を傾けながら私たち大人も共に考えていくことが大切であると考えます。

また、今年の夏休み、子供たちは我慢することも多かったのではないのでしょうか。2学期も行事の変更を余儀なくされ、子供たちの心も複雑な思いであろうと思います。大人である私たちが子供たちの心に寄り添

って安心できるようにしていくことを忘れずに行っていかなければならないと考えています。子供たちの何気ない言葉や視線、表情から子供の気持ちを察していきたいと思えますし、御家庭の中でも気になることがありますたら、いつでも学校に御連絡いただければと思います。

さて、今回のデルタ株は、従来のウイルスより感染力が非常に強く、人混みの危険性が指摘されています。人との接触を控えるとともに、マスクの適切な着用、手洗い、3密回避が有効であると言われていきます。子供たちの学びの保障をしていく上でも、感染症対策をより一層丁寧に行うとともに、学習端末であるchromebookの積極的な活用に向け準備も進めています。

暑さが厳しい中、熱中症対策も含めマスクを外す場面も出てまいります。子供たちの安全・安心を守るために、感染症と熱中症の両方の対策を行う必要があります。教職員全員で、子供たちへの指導を行っています。御家庭の協力も大きな力となります。マスクを外した際には、「会話をしない」「距離をとる」ということを子供たちに伝えていただければと思います。

また、健康的な生活（十分な睡眠、適度な運動、バランスの取れた食事）により抵抗力を高めることも大切です。規則正しい生活が送れるよう「早寝・早起き・朝ごはん」を御家庭でも合言葉にいただければと思います。

保護者の皆様と連携を図り、この難局を乗り越えていきたいと考えています。今学期も御理解と御協力をお願いいたします。

難民選手団の素晴らしさ

今年、東京オリンピックが開催されました。パラリンピックは9月5日まで開催されます。東京での開催には賛否両論がありました。私は、2016年のリオオリンピックから始まり、今回で2回目の出場となる難民選手団の方々からたくさんの力をいただきました。難民選手団というのは、紛争や迫害により故郷を追われた難民アスリートにより構成された選手団です。自分が生まれ育った故郷から、命がけで異国に渡り、異なる文化の中で生きていくことはどのような状況なのか…平和な日本で生活している私が、安易な言葉で表現することはできない状況であろうと想像します。

オリンピックでは29人の選手、パラリンピックでは6人の選手が難民の代表として出場しましたが、世界にいる約8000万人の難民を自分の家族のように思って語る選手の言葉に胸が揺さぶられました。

避難中にボートが故障した際、自ら海に飛び込み、仲間が乗るボートを押して運び19人の命を救ったというシリア出身の競泳選手ユスラ・マルディニ選手は、「私は自分が好きなことを通じて、すべての難民たちに希望のメッセージを届けたかった。難民であっても、簡単にあきらめなければ困難な旅路を経ても夢を持ち続けられる。」という言葉が紹介されていました。

母国ベネズエラが経済的に破綻し、貧困と暴力の蔓延により、トリニダード・トバゴ共和国に避難したボクシング選手エルドリック・セラ・ロドリゲス選手の言葉は、「オリンピックに参加する機会を得た私は、自分自身のためだけではなく、同じように家や夢を捨てざるを得なかった世界中の何百万人もの人々を代表

して闘う。」でした。

南スーダンの紛争を逃れケニア難民キャンプに避難した陸上1500m選手、パウロ・アモトゥン・ロコロ選手は、「難民の代表として走る。自分の勇姿を難民キャンプの仲間に届けたい。良い結果を残して、家族や友人に恩返しをしたい。」という言葉を読みました。

難民選手団の話は、子供たちにも聞かされました。子供たちに話したのは、男子マラソンのナゲーエ選手とアブディ選手についてです。1位でゴールを決めたキプチョゲ選手の後ろには、2位を争っている3人の集団がいました。その中から、オランダのナゲーエ選手が抜け出し、そのまま走り抜ければ2位になるという時に、後ろを振り向き、4位のベルギーのアブディ選手に、何度も「来い。来い。」と言わんばかりに手招きしていました。励まされたアブディ選手は、ゴール直前で3位の選手を抜きゴールイン。固く抱き合う姿は美しいものでした。実はこの2人は、20年にも及ぶ内戦で、150万人もの避難民を出し、今でも210万人が飢餓状態にある世界最貧国の一つであるソマリアの難民で、ナゲーエ選手はオランダに、アブディ選手はベルギーに避難した難民でした。異なる国に避難していても心での繋がりがあり、記者会見で「2人でこうして隣にいられるのが、本当に嬉しい。夢みたいだ。」と語っていました。

仲間の存在というのは、困難な状況を乗り越えていく力になるとともに、一人ではくじけてしまいそうになることでも、仲間の励ましが大きな力を発揮することに繋がることに改めて気づかされました。

「仲間と共に前を向き、支え合い、助け合って、笑顔いっぱい、輝く2学期にしましょう。」と子供たちに伝えました。